**№73　テーマ『近代から新しい時代への大変革期』**

**講話日2019年8月16日**

**よろしくお願いいたします。まずは私の方からの話なんですけども、前もってFAXで今日の会合の進め方について少しお話をいただいているんですけども、近々のニュース、社会情勢をその場でテーマとしてあげて、そして自分ならどう考えるかということを感性論哲学から見て、討論、意見交換をする。ということで今日はしたいと思ってやってきました。私の方からの話もその線に沿ってお話をさせてもらいたいという風に思っています。**

**世情と言うか日本にとって一番困った問題というのは、韓国との対応、また北朝鮮との対応、また中国との対応、またアメリカとの対応。いろいろそういう国際的な面での課題が直接的には非常に深刻な状態に陥って、どういう風に対応して良いのか、政府の方でも困惑している状況であります。国内でもやはりそういう社会的な経済不安が影響してきて、また全世界的に世界恐慌に突入するんではないか、という風な不安があって、さまざまな企業の業績にもマイナスの影響がどんどん出てくるようになっています。またいろんな企業で仕事量の減少に基づく人員整理みたいなことも行われ始めています。ここのところ株価も急落するようなことも多くて、やがて2万円を割るという状況に陥るかもしれないと。さまざまな予測がいろんな方によってなされているのが現状であります。表面的にはまだまだ日本はあまり大きな混乱という状態ではないんですけども、だけども自民党の政治においても、本当に皆が満足しているかと言うと、そういうわけではないし、国内的には憲法改正という議論もされているわけであります。国内外共にこれから良くなっていくというよりは、悪くなっていくという傾向性の方がより多く出始めてきているという風に考えることができると思います。**

**私が平素、情報源としてのひとつとしているのが、藤原直哉さんという経済学者あるいは経済評論家あるいは経営コンサルタントという仕事で活躍していらっしゃる方です。藤原直哉さんのワールドレポートというものが、毎週一回発行されていまして、この中で世界のさまざまな出来事や現場に対するさまざま分析が行われておりまして、これを今日は参考にしながらお話を進めていってみようかという風に思っています。そのワールドレポートを持ってきました。藤原直哉先生は経済学者ですので、経済の観点からの話が多いわけですけど、だけども政治にもまた平和の問題にもいろいろ専門分野を広げて活躍しておられるわけであります。感性論哲学にも深く関心を持っていただいて、多くの点で感性論哲学の見解と軌を一にする考え方をされている方でもあります。何年か前から知り合いになって、親交を結ばさせていただいているという関係なんですけども、この藤原直哉先生のワールドレポートの存在というものを御承知の方はいらっしゃいますか？ 一応、毎週一回ね、水曜日にレポートが発行されるんですけども、世界のこれからの情勢というものに非常に危惧をしていらっしゃる。**

**そういうことで感性論哲学の考え方と非常に合致するところがあると。とにかく今は近代から次の新しい時代への大転換期という動乱の中にある。そういうことから、どういう風にこれから世界が動き変わっていくのか。ということを我々は関心を持って見つめていなければならない。仕事上、会社の経営にあたるという観点からするならば、ただ会社の経営ということだけではなくて、世界のあらゆる情勢に関して、多くの社員あるいはその家族を抱えて仕事をしていらっしゃるという立場から、なんらかのやはり見識・見解を持って、常に世界を見つめていなければ足元は**

**危ういということになってくるのではないかという風に思います。相当、綿密に社会情勢に対して常に目を開いて見つめていくということをしていかなければならないという風に思っています。そういうことからするならば、どういう問題が社会に起こったとしても、その出来事に対して自分ならどう対処するか、どう判断するかということを超えて、自分がもし国家の総理大臣として情勢を迎えたならば、どういう風に国を運営し、世界に対応するか。そういうことも考えておくべき、というものが経営者ではないかと思います。そういう意味での見識を養っておかないと、多くの企業と関係を結びながら事業を展開していく上での意見交換という場において、相手に一目置かせることができないとなれば、それで軽く見られることになってしまいます。だから、それなりのある程度の、相手が感服するような見識を持って経営にはあたっていないといけないと思います。皆さん方も世界におけるさまざまな事件・出来事に対して、日本はこれからどういう対応をしていくのかいうことは注目はしておられるでしょうけど、もう一歩突っ込んで「俺が責任者だったら」「自分が総理だったらこのことに対してどう行動し、どう対処するか」ということを考えてみるということをしていくべきだという風に考えています。**

**とにかく、時代の大転換期ということで、予想だにしないさまざまなことが次々と起こってくるわけですけれども、大きな歴史の流れから見れば、これまでの歴史を振り返ってもすぐわかることですけども、本当に国家破綻あるいは世界の大混乱という風な事態・戦争が何回もこれまであったわけですけど、それを乗り越えながら人類は着実により良い方向性という風に言うことができるような、そういう歩みを続けてきて、古代から今日に至るまで偉大なる文明・文化をつくり上げてきたという歴史があります。そういう観点からするならば、何が起ころうとも長い目で見れば、最終的には必ず人類史というものは、人知を超えた宇宙の摂理の働きによって導かれていて、必ず良い方向へと将来は進んでいくという予見、見通しができるわけであります。そういう意味では、何が当面起ころうとも、「そうジタバタする必要はない」と。必ず良い方向性に向かっていくんだ。だけども、それは手放しでそうなると言うんではなくて、それなりにその時代に活きている人間が「どうしようか」と悩み、苦しんで、そしてその時代をより良い方向性に持っていく。絶望的な崩壊の方向性へ持ってくんではなくて、そうならないようにどうしようかということを考えながら人類は生きてきましたので、そういう関わり方を人類は歴史に対して常にしていますので、そういうことからするならば、そういう活動を通して、世界はだんだんだんだん良い方向性に動いていくと見通すことが、ひとつ、この現象に振り回されない生き方の重要な姿勢ではないかという風に思っています。**

**そういうことを考えると、今さまざまに起こっている日韓、日中あるいは日本と北朝鮮、日本とアメリカ、さまざまな世界との関係、出来事というものも。またはトランプさんの言動もすべてこれは、これからくる新しい時代を呼び起こすために必要であるから必然的に起こっている現象なんだ、という風に意識しながら見つめながら、それに対処していくことが重要であります。宇宙には偶然はない。起こることは全部必然である。ということは、起こることはすべて意味があって、その意味は何なのか、と言ったら、より良き未来をつくり出すためには、今このことが起こらなければならなかったんだ。起らなければならないという形式で、今起こっていることをすべて理解し、解釈するという姿勢が信念としてあることが大事だという風に思われます。起こることすべて必然。宇宙に偶然はない。すべてのことは意味があって起こっているんだ。だから我々は起こることから、このことにはどういう意味があるんだろうか、どういうより良き未来をつくり出すために関係しているんだろうか。そういう思いで起こる事柄を解釈し、見つめ直すことが大事ではない**

**かと思います。**

**これは人知を超えた宇宙の摂理によって導かれている人類史ですので、我々の小賢しい理性的な解釈で充分に対応できるような、そういう次元のものではありません。うっかり人間的な理性のつく為に基づく解釈や対応をしてしまえば、自らを危うくする。あるいは当面の自分にとっては悪い結果に陥ってしまうこともあるわけであって、そういう意味では解釈は慎重でなければならない。慎重というのは、自分だけの判断で物事に対処するのではなく、自分の判断というものはまず持っていなきゃならないけれども、「3人寄れば文殊の知恵」と呼ばれるように、自分の考え以外にあと二つの違った考えを探し出して、いろんな人がいろんなこと言ってますから、自分とは違うあと二つの考え方を探し出してきて、それと自分の考え方を合体させて、最終的な自分の判断を形成していく。そういう方法が小賢しい理性の判断に惑わされないための、宇宙の摂理に近い判断になっていくためのひとつのやり方であるという風に言うことができます。**

**「3人寄れば文殊の知恵」というのはどういうことかというと、なぜ3人であって、なぜ4人ではダメなのか。なぜ2人ではダメなのか。3人というのはこれはどういうことかと言うと、現実の空間というのは三次元という構造で成り立っています。だから必然的に我々が使う言語そのものが、一人称二人称三人称というそういう構造になっています。ということは、現実の社会というものは原理的にいって3つの視点から見ることによって、現実の社会での生きた実態に迫ることができる。そういう風に解釈することができるわけであります。そういう3つの視点からものを見るということが、空間の持つ構造というものに起因して人間の意識に関わってくる。それが人間の意識を支配して、人間が使う言語、言葉はすべて三次元という構造で全人類は活動しているわけであります。その意味においても、自分とは違う考え方を必ず二つ探してきて、そしてそれを参考にしながら自分の考え方と三つの考え方を合体統合して、そして最終的な自分の判断を形成してみる。これが、これからの統合の時代の理性の変え方という風に言うことができるものであります。**

**そうしていくことによって、「3人寄れば文殊の知恵」と言われるように三つの考え方を統合しながら、物事を判断したならば、そのことによって仏の知恵に近づくことができる。仏の知恵とは、宇宙の摂理の働きによって導かれている社会の正しい方向性というものに、より沿った判断や対処ができる。そういう意味で起こること全部必然。そういう風な捉え方をすることをまず必要であって、だけども自分の理性的な判断というものを持って現実に対応することは浅はかである。たとえ自分の考え方が最善と思われたとしても、他に考え方があるならば他の考え方を参考にしながら、もう一度自分の考え方を整理し直して、そして自分の偏見や偏り、主観性というものを乗り越えていくという努力が、これからは必要になってきます。そういう意味でいろんな研修に出たり、いろんな考え方の人たちの話を聞く、そういうことも経営者としては積極的に行っていかなければならない。それが自分育ての行動だという風に言うことができると思います。**

**起こることすべて必然ということは、とりあえず今起こっているこのことが、何を自分に教えるために、何を分からせるために、何を悟らされたために、何に気付かせるために、このことは自分の身に降りかかってきたんだろうか。そういう意識を持って、ことに対処していかなければならないと。偶然だからほっといて良いわけではなくて、すべて必然なのでどういう意味があるんだろうかと考えることによって、人知を超えた天の計らいというものが何なのか、ということを自**

**分が知る。そういう手立てになっていくと思います。大きな世界的な問題ではなくても、家庭の問題でも会社における人間関係の問題や取引先、さまざまな問題が必然であると。すべて意味がある。意味とは、問題というものは常にあらゆるものを良い方向性に変化・成長させるために起こってくるのであると。問題は自分を成長させるために起こってくる。問題は会社・社会・世界を発展させるために起こってくるんだ。問題は人類を進化させるために起こってくるんだ。だから、問題はなければならない。**

**そういうことを考えれば、この問題は俺をどういう風に成長させようとして起こってきたのか、何に気付けよと教えているのか、とそういう意識ですべての出来事を受け入れていく。何ひとつ排除しない、見落とさない。すべて受け入れてその意味を自分の中で考察してみる。ということが現実の対応として、望まれるわけです。そういうことを人間がするならば、そのことによって人類史は何があろうとも常により良い結果になる方向性にしか動かない。そういう確信が持てるようになってきます。**

**近代に至って自由主義という思想が起こり、自由主義経済が基本となって世界の経済の動き、貿易が行われてきています。その背景には、人間が勝手放題、自由に自分の身勝手な行動を皆がしていても、ちゃんと大元の宇宙は人間がどんな言動をしようと、より良い方向性に持っていく、という意図を持って働いているんだという風に解釈する。これをドイツの哲学者である、ライプニッツは「予定調和」という言葉でそれを言いました。なぜ人間が自由放題、わがままに、やりたい放題にやっていても良いのか。そこには人知を超えた天の計らい、予定調和という宇宙の摂理の力が働いているから。悪くなっていったら、必ずそれを揺り戻して、より良い方向に動かすという活動をさせるんだと。このことを仏教では、「大悪興れば大善きたる」という言葉で表現しています。とんでもない悪い状態になってしまったら、必ず何とかしようという思いを持った人がたくさん出てきて、また良い方向性へ揺り戻すということになっていく。それだけではなく、それを修正していく…。どんなことにもプラス面とマイナス面がありますから、良くになりすぎても駄目。世の中というのは、「過ぎたるは及ばざるが如し」という言葉があるように、どんなに良いことも過ぎれば悪なんですね。必ず揺り戻しがある。そういうことで、必ず宇宙には予定調和という力が人間の歴史の中にも働いています。**

**こういう宇宙の摂理の力を確信できるのはなぜなのかと言ったら、我々が気持ちが良いということでSEXをして子どもを産んでいますが、生まれてくる子どもは男と女がだいたい半分ずつで、バランスが保たれているということ。決して偏りがない。長い間を見てもバランスが保たれている。こういう予定調和があらゆる面で働いています。人間が自由勝手なことをしていても必ず予定調和は働いていて、全体としては悪い方向性へは行かない、揺れ動きながら、模索しながら動いている。こうして出来上がってきた力が進化と呼ばれています。**

**進化と言っても原理的には「進化は退化を伴う」と言われ、そのためには何かが退化する…という。多くの学者が言っているように、今我々が持っている文化・文明を進化と言っていいのか。という考え方、反論もあるわけです。ある学者によれば、「人類は退化している」と。太古が一番良くて、だんだんだんだん悪くなっているんだと。そういう解釈もあるわけでございます。ある意味では、ある面では、そういう解釈が妥当な面もある。進化することによって我々が失ったものの大きさを常に考えていなければ、本当の宇宙的な意味での真実というものを見誤ってしまう。実際**

**問題、理性が成長することによって本能が退化しました。それにより、育児本能の衰退、母性の衰退、父性の喪失、そういう本能的に持っていたものがどんどんどんどん退化していって、そして理性に頼らなければ何もできないという状況に陥ってしまった。これは明らかに「進化は退化を伴う」という生物学的原理が人間に関係しているということの証でもあります。**

**ということで、「まぁ、どうでもいいじゃん」ということになってしまうんですよね。最後にはちゃんと宇宙がバランスを取って揺り戻しがありながらも良い方向性に持っていってくれるのだから、眉間にシワを寄せて悩み考える必要はない、と。やりたいことをやっていれば良いと言えてしまうかもしれません。だけども、宇宙の摂理の中では、人間の言動が含まれているわけであります。人間自身が「不幸にはなりたくない」「幸せになりたい」という幸福欲を持っています。また、「生きたい」という生存欲というのも持っていますので、全体としては死の方向性にはいかない、生きる方向性へいく。そして、全体としてはより幸せを感じることができるような方向性へ向かっていく。全体としては大きな意味での方向性は、人間も宇宙の中の存在である限りは、宇宙の意志するところと人間の意志するところは、軌を一にするものだと言って過言ではありません。**